

石黒広昭・亀田達也 編  
『文化と実践—心の本質的社会性を問う—』

新曜社 2010年 四六判 240頁 ¥3045(税込)

竹内身和

本書は、学術的専門誌にはない「本」ならではの良さが生かされている。各著者は、枠にとられすぎずに、各々の研究アプローチを熱く語っている。それでいて、各論文は独白に終わるのではなく、互いが互いを意識し合い、対話を生み出している。

この本の著者たちは、共通して心の本質的社会性を主張する。つまり、心は社会を抜きにしては語れないという立場である。その共通基盤の上で、社会心理学、文化心理学、発達心理学を代表する研究者たちが心はどのように社会的であり、かつ文化的であるのかを議論するというのが本書の特徴だ。本書においてめざされているのは、自明視されがちである「心」、「社会」、「文化」、さらには「人間」を本質的に問い直そうということである。

この目的に対し、本書は効果的に構成されている。第一部は、山岸俊男（社会心理学・制度アプローチ）、石井敬子（文化心理学）、石黒広昭（発達心理学・社会歴史的アプローチ）の3論文からなる。各論文では、それぞれの立場から「社会」、「文化」が定義づけられ、各分野の基本概念的紹介と研究展望がなされている。論文の質は高くも、具体的な例を交えながらわかりやすく書かれており、初学者であっても当該分野における基本概念と研究アプローチが俯瞰できることだろう。また、読者自身の専門領域に該当する章では、領域を越える他者が読者として想定されていることで、諸概念の明確化が図られ、アプローチの独自性が際立たせられていると感じることだろう。

本書の第二部は、認知心理学（佐伯胖）、社会心理学・進化ゲーム論（亀田達也）、文化心理学（北山忍）からのコメント論文によって構成されている。本書における第二部の役割は大きい。第

一部が縦糸だとすれば、第二部の論文はそれらを引き寄せ、そこに一定の模様を織り出す役割を果たしている。たとえば、佐伯論文では、各アプローチで想定されている人間像に焦点が絞られる。佐伯は、制度アプローチが功利的なゲーム・プレイヤーとしての人間を想定するのに対し、社会歴史的アプローチでは「良さ」を探求しつつ、協働し合う人間が想定されていると指摘する。亀田論文・北山論文では、その理論を洗練させるためにも実証研究を用い、データをもとに議論を展開させる重要性が説かれる。

本書がめざすもう一つの目的は、心の本質的社会性を唱えつつも、立場を越える研究者たちの議論によって、研究対象、さらには現実的問題に対する新たな視座を提供することだと述べられている。この作業は簡単ではない。北山論文では、北海道の特異性に関する文化心理学的研究から山岸の日米比較実験を検討し直すという方向性が具体的に示されている。しかし、それを除くと、本書では三つの異なる立場の対話から新たな研究課題や現実的問題に対する視座を生み出す作業は読者に委ねられているように思われる。三つの立場は、北山論文で統合されているように相互補完的であり、一つの研究対象に対する理解を協同的に深化させてゆく可能性ももつ。たとえば、その一つの展開可能性として、心理学的アプローチから日本型多言語・多文化社会の特徴を探索し、日本型の多文化共生社会に向けた方向性を探求するという研究が考えられるのではないか。日本において、多文化・多言語状況を生きる人びとの発達の様相はいかなるものか。また、多文化状況が軋轢を生み出している場合、どのような社会環境をデザインすれば軋轢の緩和へと向かうのか。こうした課題に対し、文化心理学、制度アプローチ（社会心理学）、社会歴史的アプローチ（発達心理学）を統合することにより得られる見識は多いだろう。

本書は、社会、文化、心、そして人間を理解、研究することを希求する読者に、自らの前提と研究のアプローチを省み、新たな研究への思索に誘ってくれる良書である。